

優陀那日輝『一念三千論』本迹段について

渡邊寶陽

優陀那日輝（一八〇〇～五九）は加賀国金沢に生を受けた。母が男子を授かりたいと願って身延山久遠寺の祖師に参詣したところ、幸いに男子を得たので、出家させたという逸話は有名である。¹ 生家・野口家は秀でた一族であったようで、甥の野口之布は、日輝和上の弟子・新居日薩と漢学の同学であった。明治初年代に、野口之布は文部省・司法省に勤務したという。² 新居日薩（一八三〇～八八）が、明治六年に日蓮宗管長に指名されたのには、野口之布との関係を考慮すべきかと、筆者は愚考する。日輝和上は、京都山科檀林を経て下総の飯高檀林に学んだが、幕藩体制下での飯高檀林は、天台教学の学習を専らにしていたと伝えられる。日輝和上は、そうした状況に飽き足らず、故郷・金沢の立像寺に帰って、境内に充治園という私塾を営んだ。³ 飯高檀林や中村檀林をはじめ、宗門大寺院との関係の濃い檀林を卒えれば、それなりに栄達の道が開かれた時代は終わっていたのであろうか。大阪の適塾を始め、私塾が要請された時代であったのだろうか。

驚くことに、全国各地から、金沢の私塾「充治園」に集って、日輝和上の講義を聴く若き僧侶が後を絶たなかったという。具体的な記録はないが、愚推するところ、日輝和上は大砲の発射風景などにも接したのではないであろうか。日輝和上を招聘したのは、水戸光圀が開いた水戸三昧堂檀林であり、また、武蔵国、池上「本門寺」付置の「南谷檀林」であった。⁴ 当時、日蓮宗の宗者として見るべき方がいないということで、日輝和上は再度にわたって招請されているのである。

一、『一念三千論』の構成

『一念三千論』は、日輝和上四十歳の時代の著作である。江戸後期を通じて知られた宗学書の最たるものは、一妙日導『祖書綱要』であった。⁵⁾ 天台学隆盛の時代であったが、日導は昼も雨戸を閉めきって、ひたすら『日蓮聖人遺文』の研鑽に努めたという。しかし、天明五年（一七八五）に著した『祖書綱要』二十三册全巻が版行されたのは、遙かに時を経てのことである。版行は困難を極め、遂に新潟県・角田浜の「妙光寺」の事成日寿の手によって版行された『祖書綱要刪略』三巻が広く普及した。⁶⁾

日輝和上は三十歳のとき、『綱要正議』を書いた。⁷⁾ 『綱要刪略』を読み込んで、独自の視点からサマライズを試みたのである。新居日薩は、『一念三千論 序』に、「日輝が三十歳で『綱要刪略』を著して宗学者としての自立を示し、四十歳で『一念三千論』を著して、宗学者としての完成を示した」という趣旨を述べている。前稿でも述べたが、天台大師智顛（五三八～五九七）の『摩訶止観』の叙述が綿密で、おそらく智顛の脳裏につきつぎに言葉が浮かんできたのではないかと思われるが、日輝和上の『一念三千論』も、思考が瀑布のように日輝和上の頭脳を駆け巡ったのではないかという気がしている。

『庵谷行亨先生古稀記念論文集』（二〇一九年・山喜房仏書林刊）に、優陀那日輝和上の『一念三千論』のうち、「第五、理事」の段についての考察を誌した。本稿は、それにつづく「第六、本迹」についての覚え書きを記した。前稿に誌したように、「五、理事」は『一念三千論』全体の三十七パーセントを占めた。今回の「六、本迹」は、全体の四十九パーセントである。

前稿で述べた通り、『一念三千論』は『優陀那日輝和上 充治園全集』第三篇⁸⁾に活字体で収載されているが、漢文の組みで、四十七字×十四行・二〇頁～二三二頁に及び、およそ十四万字（十三万九四九六字）である。同書は、これを、

一、数量（二〇頁1行～二四頁12行）

二、本末（二四頁13行～三二頁14行）

三、造成（三三頁1行～四一頁5行）

- 四、広略(四一頁6行～四三頁13行)
- 五、理事(四三頁14行～一〇三頁14行)
- 六、本迹(一〇四頁1行～二〇六頁7行)
- 七、台当(二〇六頁8行～二二三頁13行)
- 八、心念(二二三頁14行～二二八頁2行)
- 九、空有(二二八頁3行～二二五頁4行)
- 十、権実(二二五頁～二三三頁10行)

の十綱目から構成されている。これらを合計すると二百二十二頁と二分の一頁になり、「五、理事」はおよそ六十頁＝三十七パーセント。「六、本迹」はおよそ百二頁と二分の一頁で＝全体の四十九パーセントを占めている。「五、理事」、「六、本迹」の主要部分が、八十六パーセントを占めている計算となる。本小稿では、「五、理事」につづいて、「六、本迹」の科段を一覧することとする。

ふり返って見ると、天台大師智顛(五三八～五九七)の『摩訶止観』は、序文に次いで、「一、標章 二、生起 三、分別 四、料簡 五、広釈」から成るとされる。いわゆる、五略・十広である。すなわち、五「広釈」(十広)のもとに、十章が展開する。第一章「大意」、第二章「釈名」、第三章「顕体」、第四章「攝法」、第五章「偏円」、第六章「方便」、第七章「正修」、(その後は講説されていないが)第八章「果報を示す章」、第九章「教を起すことを示す章」、第十章「帰結する主旨を示す章」という構成である。⁹⁾

愚推すると、天性の鋭敏な思考力を内蔵していた日輝和上も、『摩訶止観』のひそみにならって、『一念三千論』を講ずるにあたって、全体を【甲】の「十綱」とし、その下に、【乙】【丙】【丁】と分科し、さらにそれ以下に、《戊》《巳》《庚》《辛》の十干によって分科している。¹⁰⁾

そのような綿密な構成によって論が展開されているのである。

二、「六、本迹」の構成

【甲】「本迹」

【乙】一、一念三千

【丙】一、義

【丁】一、十界互具

【戊】初、「十界」

【戊】次、「互具」

《己》初「九法界に仏法界を具すを明かす 文義」

《庚》初「弁」

《庚》二「結」

《己》①「仏法界に九法界を具すを明かす 文義」

《己》②「界界に互に具すを明かす 文義」

【丁】二、十界十如

【丁】三、三種世間

【丙】二、文

【丁】一、迹の文を釈す

一〇四頁	2行
一〇四頁	2行
一〇四頁	2行
一〇四頁	3行
一〇四頁	3行
一〇四頁	3行
一〇四頁	12行
一〇四頁	12行
一〇四頁	12行
一〇四頁	13行
一〇四頁	13行
一〇八頁	5行
一〇八頁	5行
一〇八頁	13行
一一一頁	9行
一一三頁	2行
一一三頁	2行
一一三頁	4行
一一四頁	2行
一一四頁	2行

【戊】初、「一念三千の依拠を弁ず」	一一四頁	3行
【戊】次、「正しく経疏の文義を解す」	一一五頁	4行
《己》〇「経文」	一一五頁	5行
《庚》初「標章」	一一五頁	5行
《辛》初「非をはらい」	一一五頁	6行
《辛》二「是を顕す」	一一七頁	13行
《庚》二「釈の文を解す」	一二〇頁	5行
《辛》初「句逗」	一二〇頁	6行
《辛》二「句数」	一二〇頁	7行
《辛》三「次第」	一二〇頁	10行
《辛》四「因果」	一二一頁	2行
《辛》五「事理」	一二一頁	6行
《辛》六「権実」	一二一頁	9行
《壬》初「非をはらう」	一二一頁	9行
《壬》〇「是を顕す」	一二五頁	9行
《辛》七「如是」	一二七頁	13行
《辛》八「初句」	一二八頁	3行
《辛》九「名義」	一二八頁	5行
《壬》初 名義	一二八頁	5行

《壬》①「通を例す」	一二九頁	6行
《辛》①「偈」	一二九頁	10行
《己》①「釈義を解せば」	一三〇頁	1行
【戊】三、四仏知見を対弁せば	一三一頁	3行
【丁】二、本の文を釈す	一三三頁	1行
【戊】①「大意」	一三三頁	4行
《己》初「久遠実成」	一三三頁	5行
《己》①「三世益物」	一三四頁	1行
《己》③「器界常住」	一三四頁	5行
《己》④「能所同体」	一三四頁	7行
《己》⑤「十界本有」	一三四頁	9行
【戊】①「実相」	一三四頁	12行
《己》①「総論」	一三四頁	12行
《己》①「別解」	一三五頁	3行
《庚》初「権実」	一三五頁	3行
《庚》①「互具」	一三六頁	5行
《庚》③「因果」	一三七頁	12行
《庚》④「依正」	一三八頁	9行
《辛》①「総別門」	一三八頁	10行

《辛》②「因果門」	一三八頁	12行
《辛》③「色心門」	一三八頁	14行
《庚》⑤「三諦」	一三九頁	4行
【戊】③「釈文」	一四〇頁	4行
《己》初「長行」	一四〇頁	4行
《庚》初「形声不虛」の文	一四〇頁	5行
《辛》初「形声の文」	一四〇頁	5行
《辛》①「不虛の文」	一四一頁	13行
《庚》①「本行菩薩道」の文	一四四頁	10行
《辛》初 經文の大意	一四四頁	10行
《壬》① 因寿果寿	一四四頁	11行
《壬》② 有尽無尽	一四五頁	2行
《辛》② 疏釈の義趣	一四六頁	8行
《辛》③ 今所有の義く宗祖『本尊抄』	一四六頁	11行
《己》次「偈中両文」	一四七頁	4行
《辛》初「俱出靈山」の文	一四七頁	4行
《辛》次「我此土安穩」の文	一四七頁	9行
【戊】④「本迹」	一四八頁	10行
【戊】⑤「三千」	一四九頁	8行

《己》初	本迹合論	一四九頁	8行
《己》①	本迹各論	一五五頁	8行
《庚》①	迹門理具	一五五頁	8行
《庚》②	本門事具	一五五頁	12行
《庚》③	法数を結成す	一五六頁	1行
【丁】二、二門宗要		一五六頁	8行
【丙】三、意		一五七頁	1行
【丁】初	「要を結んで重ねて経の文義を弁す」	一五七頁	3行
【戊】初	「一念三千 経に文なし」	一五七頁	3行
【戊】二	「通別両義 三文を弁す」	一五七頁	13行
【戊】三	「三種の三千 三文を解すとは」	一五八頁	2行
【丁】二	「理具事具、本迹を分かつ」	一五八頁	8行
【丁】三	「教観の二道、寿量に在り」	一五九頁	5行
【丁】四	「心・仏・衆生 妙法を解せば」	一六〇頁	2行
【丁】五	「不二の妙旨 三千を開く」	一六〇頁	7行
【丁】六	「十界常住 宗極を弁す」	一六〇頁	13行
【丁】七	「教行人理 旨帰を識る」	一六二頁	2行
【丁】八	「分身・地涌 所表を識る」	一六二頁	7行
【丁】九	「一念隨喜 觀行を立つとは」	一六二頁	11行

【丁】十、「身根清淨 証道を顕す」	一六二頁	13行
【乙】二、境 智	一六四頁	1行
【丙】初 境智分別	一六四頁	1行
(2) 境智相釈	一六五頁	14行
(3) 境智傍証	一六七頁	1行
(4) 六境同異	一六八頁	7行
(5) 三智分別	一七〇頁	3行
(6) 情智料簡	一七〇頁	6行
【丁】初 情智分別	一七〇頁	7行
【丁】次 寿量の文義を料簡す	一七一頁	11行
【戊】先ず略して論の本を立つ	一七一頁	11行
【戊】次 寿量の文義を料簡せば	一七三頁	13行
《己》初 立意	一七三頁	14行
《己》① 推理	一七四頁	3行
《己》② 通義	一七五頁	14行
《庚》初 文に依って理を弁す	一七五頁	14行
《庚》① 非を簡ぶの文を料簡す	一七六頁	12行
《庚》② 情智を開する無き文を料簡せば	一七九頁	1行
《己》④ 証文	一七九頁	13行

【乙】三、「因 果」	一八〇頁	7行
【丙】初に総じて三千に約す	一八〇頁	8行
【丙】②十界に約す	一八〇頁	12行
【丁】初に 別	一八〇頁	13行
【丁】①に 総じて因果を判ぜば	一八一頁	7行
【丙】③仏界に約す	一八一頁	9行
【丙】④權實に約す	一八一頁	12行
【丙】⑤本迹に約す	一八二頁	3行
【丙】⑥十如に約す	一八三頁	2行
【丙】⑦五陰に約す	一八三頁	13行
【乙】四、「三諦」	一八六頁	4行
【丙】初「三千に対して弁す」	一八六頁	8行
【丙】①「諸教に約して明かす」	一八九頁	11行
【乙】五、「実相」	一九四頁	9行
【乙】六、「妙法」	一九九頁	1行
【丙】初、「実相に対して弁じ」(名体)	一九九頁	1行
【丁】初、「名体」	一九九頁	1行
【丁】二、「本迹」	二〇〇頁	6行
【戊】①実相は智の所照に就いて言う	二〇〇頁	6行

【戊】 ㊶実相は体に就いて言う	二〇〇頁	13行
【戊】 ㊷実相は、非実に簡ぶ	二〇一頁	1行
【戊】 ㊸実相とは、九界の境に就いて仏の所見を示す	二〇一頁	3行
【丙】 二、「五義に対して弁ず」	二〇一頁	8行
【丁】 初、台祖、諸教を釈するに、先ず經所詮の五義を詮す	二〇一頁	8行
【丁】 二に、觀とは行人一念の心	二〇二頁	1行
【丙】 三、「五字各解せば」	二〇二頁	6行
【丁】 初、「妙法」	二〇二頁	6行
【丁】 二、「蓮華」	二〇三頁	12行
【戊】 一、「本迹の六譬」	二〇三頁	13行
【戊】 二、「具足因果」	二〇三頁	13行
【戊】 三、「不二本迹」	二〇四頁	3行
【戊】 四、「三身如来」	二〇四頁	10行
【戊】 五、「性の三因、修の三徳」	二〇四頁	12行
【戊】 六、「一体の身土」	二〇四頁	13行
【丁】 三、「経」	二〇五頁	10行

三、「本迹」段の概要について

上記の科段に示されるように、【甲】「本迹」の【乙】段は、次の六段から構成されているが、前述したように、『優陀那日輝和上 充治園全集』第三卷所収の活字本の『一念三千論』（活字本）二百十二頁のうち、「第六、本迹」の部分はそのうちの四十九パーセントを占めている。これらについて簡単に要約することは困難であり、いずれ書き下し文を作成したうえで趣旨を詳述したいと願うところである。そこで、ここでは「本迹」段のおおまかな趣意についての覚え書きを記すことを試みたい。再度確認すると「本迹」段は、つぎの六面からの詳述である。

- 【乙】一、一念三千 (一〇四頁 1行)
- 【乙】二、境智 (一六四頁 1行)
- 【乙】三、因果 (一八〇頁 7行)
- 【乙】四、三諦 (一八六頁 4行)
- 【乙】五、実相 (一九四頁 9行)
- 【乙】六、妙法 (一九九頁 1行)

茂田井教亨先生は、『充治園全集』第三卷の解説において、最初の【乙】「一、一念三千」が最も評価されているとし、「見るべき美言が多い」としている。【乙】「一、一念三千」の下には、【丙】「一、義」「二、文」「三、意」が置かれている。【乙】の六段の総ページ数は九十五頁であるが、そのうち、【乙】「一、一念三千」は六十頁に及ぶ。他の五段のページ数は三十五頁に過ぎないこととなる。【乙】「一、一念三千」に主力が注がれていることがわかる。

【丙】「一、義」（ほぼ十頁）では、【丁】①「十界互具」（一〇四頁3行〜一二三頁1行）、②「十界十如」（一二三頁2行〜4行）、③「三種世間」（一二三頁4行〜一二四頁1行）について基本事項が解説されている。ここでは①「十界互具」に紙数が費

やされている。

【丙】「二、文」においては、①【丁】「迹の文を釈す」（一一四頁2行～一三三頁14行）、②「本の文を釈し」（一三三頁1行～一五六頁7行）、③「二門宗要」（二五六頁～一五六頁14行）を論じている。そのうち、茂田井教亨先生は、『優陀那日輝和上充洽園全集』第三編の「解説」に於いて、特に「二、本の文を釈す」に着目している。即ち、はじめに下記の文章を掲げている。

「二に本の文を釈せば、理事の一念三千、ならびに寿量の実相を以て本源と為す」（一三三頁1行）と言ひ、「故に今要文を出して本義を釈し（迹・本）二觀の淵源を弁ぜん」として、「六重の本迹・三身の形相・寿量の縁起・譬喩の属意・十妙の同異・悲智の深極等の旨」等の名を挙げるが、「具には別記の如し」として、ここでは触れていない。（一三三頁2行）それにつづいて「当家の境觀、事行相状、後科に弁ずるが如し」と言ひ、その上で「觀心の源基、三千の立意、三諦深の同異等、亦下に至つてこれを弁ず」と言ひ、「今正しく一品の要文要義を釈すに分かちて五科と為す」として、初に《戊》「大意」の下に、①久遠実成・②三世益物・③器界常住・④能所同体・⑤十界本有の五科について詳述する。（一三三頁4行～）

①「久遠実成」では、「寿量法門の發首なり。有数に約して無数を頌す。有始に約して無数を顕し、有始に約して無始を顕す。是れ其の主旨なり」（一三三頁5行）と、久遠実成の积尊の救いを述べる。繰り返し述べるように、日輝和上は、「事觀」の境智を終始究明しようとしている。言うまでもなく、日蓮聖人の宗教は「題目專唱」を究極の仏教把握とする。が、日蓮宗が定着するにしたがつて、仏教の基幹である「三昧」への帰入が課題とされるようになって行く。すなわち、『摩訶止觀』についての講註などが散見されるほか、深草元政（一六二二～一六六八）の『草山集』、觀如日透（二六五三～一七一七）の『本門事一念三千義』、本妙日臨（一七九三～一八二三）の『妙経觀心略解讚』などの著作が行われている¹⁾。筆者は、日輝和上が加賀金沢の文化に生きたと理解するものである。京都文化圏の中で、「但信口唱」を基本としつつも内觀の「三昧」の境地を融合を求めたと理解したい。「久遠実成」の救済の世界を「事觀」の境地として捉えようとする場合、日輝和上の『天台三大部』を中心とする天台学

の教養が「事観」究明と融和せざるを得なかつたかと思われるのである。日輝和上が日蓮聖人の『事観』を求めるなかで、『天台三大部』等との融合に到るのには、そのような背景があったと思われるのである。

そのような理解に立つておおまかに捉えようとすると、以下の②⑤は、これにつづいて、久遠の釈尊の救いについての補説と捉えることが出来るであろうか。

《戊》①「実相」（一四九頁～一五二行）の下に《己》初「総論」（一三四頁一頁～一三五頁三行）、②「別解」（一三五頁三行～一四〇頁三行）が配される。初「総論」では、次のように語られる。

「実相とは、眞実の相貌なり。謂く、三界の依正の十界の名実。天然の自相。是を実相と名づく。謂く、仏智所見の実相の体。全く一切衆生自爾の相貌にして、仏と衆生と、実相に二無し。虚融無差。全く十方三世。十界の依正。以て一人の身相と為す。亦以て一心の常相と為す。」（一三四頁一三行～一三五頁一行）

このように、「実相」とは、仏陀釈尊の究極の境地であると共に、一切衆生が本来内蔵しているすがたであるとしている。この内容を、以下に、久遠釈尊の救済に帰依していく様相として究明されていくのである。日輝和上は、その境地を闡明していくことを基本としているものと想定するものである。

そうした内容が、乙「一、一念三千」。乙「二、境智」として究明されていく。それらの詳細を追って行くには紙数が不足するので、それらの概要を確認していくこととする。

乙「一、一念三千」につづいて、

乙「二、境智」の段が設定されている。その下に六項目からの論理的追求が行われる。

丙「(1) 境智分別」（二六四頁一行～一六五頁一四行）

ここでは「境智は函と蓋との関係」にあるとして、論が展開され、「一念三千の境は一念三千の観を以て之を観ず」

(一六四頁3～4行) と言ひ、

「問う。事の一念三千の境観は如何」の問いに対して、

「答ふ。三千法界、取つて以て自己一念の全体と為す。是を事一念三千と為す。本と自爾、斯くの如し。名づけて妙法と為す。行人、之を取つて所観と為す。故に名づけて妙境と為す」(一六五頁1行～2行) と言うのである。この段の最後には、「宗祖曰く、一念三千の観法に二あり。一に理観、二に事観」の祖訓を挙げている。(一六五頁13行) そうした論理的展開が行われているのである。

丙〔2〕 境智相釈」(一六五頁14行～一五七頁1行) ここでは「十如、境を挙げて、智を釈す。以て能く理に契いて義に契う」(一六六頁1行)。「唯一の仏智、唯一の仏境を照らす。衆生所見の当処、全く一仏境界なるのみ」(一六六頁5行) などの言が基本となっている。

丙〔3〕 境智傍正 (一六七頁1行～一六八頁7行) 「一念三千、是れ境の実相にして、智の所照の証得なり (一六七頁6行) の語がある。

丙〔4〕 六境の同異」(一六八頁7行～一七〇頁3行) 『法華玄義』の「境妙を明かす」の段から転じて、「十如」「十二因縁」「四諦」~~~~は、『事に約す』と言ひ、「二諦」「三諦」「一諦」~~~~は、『理に約す』とする解釈を展開する。

丙〔5〕 三智分別」(一七〇頁3行～6行) 「一切智」「道種智」「一切種智」の三智について、左記のように意義づけている。(一七〇頁5行～6行)

- | | | | | | |
|---|------|------|-----|-----|----------|
| ① | 一切智 | ~~~~ | 三千 | 即 | 一念を照らす。 |
| ② | 道種智 | ~~~~ | 一念 | 即 | 三千を照らす |
| ③ | 一切種智 | ~~~~ | 非一念 | 非三千 | 非異非同を照らす |

丙「(6) 情智料簡」(二七〇頁7行～一八〇頁6行)では、【丁】初「情智分別」、【丁】次「寿量の文義を料簡す」の二項から成る。

【丁】「初」では、「智」と「情」の語義について論じている。

「智とは、心、物に対す。所対の境の如し。能知分別の心、是れなり。是れ正しく識陰の用なり。

情とは、心、所対の境に随つて、違順の相ありと雖も憎愛を起こすの心是れなり。是れ正しく行陰の用なり。〜」(二七〇頁7行～8行)

すなわち、「智とは〜能知分別の心」であり、「情とは〜憎愛を起こす心」であるとして、真理を究明する心の作用と、愛憎に揺れる心理とについて恐察していると言えようか。

その上で、【丁】「次」において「寿量」の文義について考察を進めるのであるが、【戊】①で、「先ず略して論の本を立つ」(二七一頁1行)として、衆生の理における鹿と妙。仏の随情、について考察する。

「理は鹿妙に非ず。衆生の智、境に於いて鹿を見て、随情と名づく。

仏の情は、境に於いて妙を見て、随智と名づく。祇だ本と鹿妙に非ざるを妙と名づく。亦鹿亦妙を鹿と名づく。仏能く鹿妙に非ざると知る。

(それに対して) 衆生は、但だ鹿妙に非るものは、鹿妙に無きの謂いに非ず、鹿妙の体一不可思議を鹿妙と名づく
〜」(二七一頁1行)

このように、「鹿妙」の論議を展開した上で、日蓮聖人の『観心本尊抄』の「己心の三千具足三種の世間」の文についての理解を示すのである。

「文は但だ十方の仏土 三世の九界を指して、全く自己の妙心、法界中に、一色も性に非ざることなく、一香も実相に非ざることなし。一声一味も仏法に非ざることなし」(二七二頁9行・10行)

「良(まこと)に以て、一切衆生の色心、全く選れ本仏無作の妙色妙心なり。故に九界の情想、即ち是れ仏界の所見なり」(一七三頁7行・8行)

このように、天台三大部等を読み込みながら、日蓮聖人の『観心本尊抄』等の遺文に照らして、「一念三千」を原理的教説としつつ、久遠釈尊の救済の教えを体感しようとする姿勢が、日輝和上の『一念三千論』の基本にあると思われるのである。

以下の各段における思索の軌跡を追ってみることにしたい。

【乙】「三、因果」(一八〇頁7行)

この段の最初から、七科として論じていくことが述べられている。(1)「三千と一念との関係」、(2)「十界の理解」、(3)「仏界についての理解」、(4)「権実との関係」、(5)「本迹との関連」、(6)「十如との関連」、(7)「五陰との関連」である。以下、その論点について、気づいた文章に沿ってメモすることとしたい。

【丙】(1) 総じて三千に約す(一八〇頁8行～12行)

「理事の三千」 「因」 「三千、冥伏して一念に在る」

「事成の三千」 「果」 「一念、徧く照らして三千を融す」

(一八〇頁8行)

「然るに凡夫の一念、実は隔たらず。故に因、因に非ず。但だ不覚・不知・不見を以て之故に、情自ずから不融と為す。是の故に因と名づく。聖人の一心、実には始めて融するに非ず。故に果にして果に非ず。但だ、知見覚を以ての故に果と名づく。」(一八〇頁9行・10行)

【丙】(2) 十界に約す(一八〇頁12行～一八一頁9行)

【別】「因は自他に通じ、果は自に在り。」（一八〇頁13行）

【総】「九界を因と為し、仏界を果と為す。」（一八一頁7行）

【丙】〔3〕 仏界に約す」（一八一頁9行～12行）

「人に約せば、但だ住上法身を 『仏界』 とす。」

「行に約せば、名字（即）以上を 『仏界』 とす。」

「義に約せば、亦、 『理即』 を取る。」

「理に約せば、得忍以上を 『仏界』 とす。」

「名に約せば、但だ 妙覚を 『仏界』 とす」（一八一頁10・11行）

【丙】〔4〕 権実に約す」（一八一頁12行～一八二頁3行）

「三教は是れ権にして 因」（一八一頁12行）

「圓教は是れ實にして 果」（一八一頁13行）

【丙】〔5〕 本迹に約す」（一八二頁3号～一八三頁2行）

「遊於四方 直至道場」 〓 迹門の因果 〓 （一八二頁4行）

「得入無上道 速成就仏身」 〓 本門の因果 〓 （一八二頁5行）

【丙】〔1〕～〔5〕に於いて、「因」「果」の両面についての考察が行われてきたが、

〔6〕～〔7〕においても、「因」「果」が問題となっている。これは「一念三千の事観」における〈修行面〉と、到達するべき〈果〉についての考察と捉えてよいのであろうか？

【丙】〔6〕 十如に約す」（一八三頁2行～13行）

「十如因果、往々已に分別す」とした上で、「若し、本門に約せば」として、

相・性・体・力・作・因・縁・果・報・本末究竟等の十如是について、經文を示している。(なお、このあとに別のパターンを挙げている)

「無作の応身を如是相と為す」 〓 「如来如実知見三界之相。無有生死」等

「無作の報身を如是性と為す」 〓 「如来明見無有錯謬」

「無作の法身を如是体と為す」 〓 「諸仏如来皆如是。為度衆生皆実不虚」

「如是力と為す」 〓 「如来秘密神通之力」

「如是作と為す」 〓 「所作仏事未曾暫廢」

「如是因と為す」 〓 「我本行菩薩道」

「如是縁と為す」 〓 「広供養舍利」

「如是果と為す」 〓 「成仏已来甚大久遠」

「如是報と為す」 〓 「我此土安穩天人常充滿」

「如是本末究竟等と為す」 〓 「今古無二。無始無終。非本非迹。」

(一八三頁3行～7行)

【丙】(7) 五陰に約す(一八三頁13行～一八六頁13行)

略説・広説との二面から論ずる。先ず、略説で、五陰世間を因とするか果とするかとの問いに、「もしは因、もしは果」と答え、以下、これをめぐる問答を展開している。(一八三頁14行～一八五頁14行)

広説については、「広説とは、因果の理義、論甚だ広し。其のあらかじめここに論ずべきが、略して前に説くが如し。尚、余論の弁ずべきものあり。宜しく別論すべし。〓〓」(一八五頁14行～一八六頁1行)と語るのである。

【乙】「四、三諦」

空諦・仮諦・中諦の「三諦」との関連について考察する。

最初に、「三諦とは、『輔行』(五の三・九紙)に云く、一念の心に十界に約せずんば、事を収めるに徧ねからず。三諦に約せずんば、理を撰するに周ねからず。十如を語せずんば、因果徧ねからず。三世間無くんば依正尽くさず(文)」。当に知るべし。三千を論ずれば則ち必ず三諦を論ずるなり(一八六頁4行～5行)と言う。

次いで、「『輔行』五之三(五紙)に云く、三諦は形無し。俱に見るべからず。然るに即仮の法、事に寄つて弁ずべし。此の假法に即して、即空・仮・中。空・中二諦、二にして二無きなり。心性動せず。仮に中の名を立て、三千を忘浪して、仮に空の称を立て、亡すと雖も存す。仮に仮の号を立つ。(文)の文」を挙げて、和上の論を展開する。

「是れ、審びらかに円実の三諦を明かすの明文なり。即ち圓妙の三諦、必ず当に三千に約して弁ずべき故なり。」として、「初に三千に対して弁じ、二に諸教に約して弁ず」と論を展開する。(一八六頁6行～8行)

初に『峨眉集』⁽²⁾を引いて、「三千は体」とし、「一念三千は、横に一異に約す。円融の三諦は豎に有無に約す。諸法本来虚無非ず。実有に非ず。故に三諦円融なり。一如に非ず。各異に非ず。故に一念三千なり。〳〵」(一八六頁11行～13行)と述べる。

以下、綿密な論述がつづくが、要するに、「一念三千」を論ずれば、かならず、空諦・仮諦・中諦の三諦を論ずることに繋がるとするのである。

通常、常識的には、「事一念三千」を論ずることによって、自己の内心に久遠実成の釈尊の救いを見ることを結論として、「三諦」などにふれることは無かつたかと思われるが、日輝和上が、論理的整合性をあくまで究明しようとするとき、「三千」を論ずれば、「三諦」の論理構造と交錯するとして、その構造を究めようとしたと理解したい。

【乙】「五、「実相」」 (一九四頁9行～一九八頁5行)

この項においては、諸経の「諸法実相」解釈に対して、『法華経』における「諸法実相」の特殊性について論じている。その要諦は次の文にあると見たい。

「然るに実相の極要は、諸法一体にあり。何となれば、迹門は則、諸乘一乘を以て宗となす。本門は則、諸仏即一仏を以て極と為す。迹門は則、五仏道同・十方一乘を言い、本門は則、諸仏如来法皆如是と言う。」（一九四頁12行～14行）

【乙】「六、「妙法」 （一九九頁1行～二〇六頁7行）

言うまでもなく、日蓮聖人の結論は、『妙法五字』の受持にある。「受持即成仏」の教えである（渡邊寶陽『國寶観心本尊抄鑽仰』参照）。日輝和上『一念三千論』「本迹」段の帰結は、当然、此の事にある。【乙】六として「妙法」が配置されるのである。最初に、「妙法」の趣旨が、三科によって示される。

「六に妙法とは、初に実相の弁に対して弁じ、二に五義に約し、三に五字各解す」（一九九頁1行）

【丙】『初』に、「実相」と「妙法」とは俱に名字であつて別ものではないとする。即ち、「有法不可思議であるから『妙法』という」「可見であつて虚妄でないから『実相』というのである」（一九九頁1行～2行の趣意）このことを起点として、「妙法」と「実相」の関連について詳述する。

「二に本迹とは、「妙法」「実相」皆、本迹に通ずる。然るに天台でも日蓮宗でも迹門の理を「実相」と言い、本門の理を「妙法」と言うとし、それについて「四義」があるという」（以下は、意図するところを参酌して、文章に即しつつ意訳した）

- (1) 「実相」は、智の所照について言うから、「唯仏与仏乃能究尽諸法」などと言うのである。（二〇〇頁6行～7行）
- (2) 実相は体に就いて言う。妙法は用に就いて言う。
「妙」は徳に就くから、用に随うのである。

「実」は非を簡ぶから、体に従うのである。(二〇〇頁13行～14行)

(3) 「実」は、非実に簡ぶから、廢權の義が強い。

「妙」は、即是を顕すから開權の義が強い。

「迹門」は、九界を廢して仏界を立てて、廢權の義が強い。

「本門」は、九界を開いて仏界を顕し、開權の義が強い。(二〇一頁1行～2行)

(4) 「実相」とは、九界の境に就いて、仏の所見を示す。故に「諸法実相」「如 実知見三界之相」という。

「妙法」とは、仏の所証得に就いて名付ける。故に「無漏不思議 甚深妙 法。我今已所得」という。(二〇一頁3行～5行)

『丙』二、五義に対して弁ず

『丁』(1) 教「名」「体」「宗」「用」「教」の『五重玄義』

「然るに、名は是れ能證の宗要にして、所證の所依。故に独り能所に通じるに似る。なんとすれば一部の經意を結んで名となせば、則ち名は一部の所證にして、体・宗とともに所證となる。若し能證が家の名となせば、則ち一部の題目のみ。乃ち能證・所證の文理、皆、妙法蓮華經を以て名となせば、則ち法界の事理、不思議の因果、以てその名を立つ。故に一部能證の章句、部内所證の玄理、玄理所證の法界、玄理能取の因果、能證益物の功要、皆尽く、玄名を以て括括す。故に妙名五重及び一切名句を摠す。至要の円證なり」(二〇一頁11行～二〇二頁1行)

長々しく引用したが、要するに、五重玄義のうち、「名玄義」は「能證所證の文理」であり、「法華經」一部能證の章句である。即ち「妙法蓮華經」に『法華經』の全てが包含されているという趣意であろう。それを踏まえて、「二に『觀』の意義」が述べられる。

【丁】(2) 観

「二に観とは、行人一念の心、三千法界を撰して、衆生の所見の如くならず。不生不滅、非如非異なる。是を玄体と為す。此の妙心、当体法界にして、因に非ず、亦果に非ず。面して微なるを因と為し、著なるを果と為す。因時則法界。果時即唯心。因果皆不可思議なり。是の妙因妙果、三千に具足し、三諦を円備す。是を妙法蓮華経と名づく。――」(二〇二頁1行～3行)

上記の『教』として詮顕された、最高の教法である『妙法蓮華経』を「一念の心において観察すること」の意義が、この『観』の問題とするところである。

【三】「五字各解」

つぎに、『妙法蓮華経』の五字について、『初』に「妙法」、『二』に「蓮華」、『三』に「経」についての詳解が展開する。

【初】「妙法」 (二〇二頁6行～二〇三頁12行)

【二】「蓮華」 (二〇三頁12行～二〇五頁10行)

【三】「経」 (二〇五頁10行～二〇六頁7行)

四、小 結

三、「本迹段の概要」で述べたように、茂田井教亨先生は、【乙】「本迹段」の六科のうち、【乙】「一、一念三千」の段に注目している。

筆者は、百頁に及ぶ「本迹段」の概要について、科段をたどってみた。日輝和上は、【乙】「一、一念三千」段を中心に、『法華

『経』迹門と本門との関連を見ながら、「一念三千」についての考究を試みているものと理解したい。但し、「一、一念三千」において、その骨格を確かめた上で、「二、境智」「三、因果」「四、三諦」「五、実相」「六、妙法」との関連において、綿密にその全体像を究明する意図を持って考究を進めたみたい。

たびたび繰り返すように、日蓮宗の歴史において、このような綿密な考証を試みた例は、他に見なかったのではなからうか。

日蓮聖人は、東国安房国から当時の日本の中心である京畿の、しかも日本仏教を統合する比叡山に登られた。後年、弟子の三位房を台学研鑽のために比叡山に派遣するが、三位房は京都の風に染まって、言葉も京都なまりになり、名前まで京都風に称したことを、日蓮聖人は叱責している。それも空しく、三位房は日蓮聖人の許から去ってしまうという悲劇となった。

日蓮聖人には、東国安房国の人びとの顔が浮かび上がり、それらの人びとの思いから離れることが出来なかったのではなからうか。それ故に、日蓮聖人は、敢えて法難の連続を覚悟しつつ、『立正安国論』を鎌倉幕府に奏進し、そのために、いわゆる四大法難に象徴される「法難連続の御生涯」を送ることとなる。通常の凡人には到底耐えることのできない御生涯であった。

そのような思いから叡山仏教に於ける「念仏三昧」の実状に耐えることが出来なかったことが、日蓮聖人の「立教開宗」の基本にあると筆者は思考する。

恵心僧都源信の流れを汲む『往生要集』の仏教から、天台大師智顛の『法華経』中心の仏教へと、日蓮聖人が急展開するとき、もはや叡山にとどまることは出来ず、ひたすら東国安房国の清澄寺に駆け戻り、立教開宗を宣言せざるを得なかったものと、最近、しきりとその状況が目に見えかぶるのである。

その後の門下の進展は、ひたすら日蓮聖人のその教えに殉ずることであった。

だが、日本国は天下一統の時代を迎えていく。言わば、宗教も政治との関連を避けるわけにはいかない時代を迎える。日蓮宗は、最後まで政治に従属し、権力の庇護を受けることを避けた。そのために、あくまで信心中心の活動体である伝統を貫いて現

在に到っていると思考する。

とは言え、日本の国家体制から逃れるわけにはいかなかった。そうした幾多の歴史については、それらの研究に委ねることとして、ここで、日輝和上の生涯に目を転ずれば、加賀国金沢は京都文化圏にあり、専ら行動的な宗風とは一線を画さねばならなかったであろう。本妙日臨の生涯に見るような、時代の中で真摯に生きる僧俗が多数存在したのではなからうかと推論する。

新たな時代の到来を感じて、日輝和上は、論理的な対応を勘案する道に進んだのではなからうか。しみじみと論理性を求めて綴った『一念三千論』の世界に驚嘆するのである。

愚鈍な筆者にとって、『一念三千論』への挑戦は、決して満足のいくものではない。が、明治の時代に日蓮宗を確固たる存在にするために時代に挑戦した新居日薩師が、諸宗に伍していくためには、日輝和上の教学を要としなければならないとして挺身した意図に同感するのである。しかし、多くの教学者先師は、日輝和上を尊崇することを重く見てか、体系的な理解という姿勢をとらなかつたかと愚感する。体系的に論じたのは、望月歆厚先生であり、執行海秀先生であった。

まことに粗稿であるが、今後、後進諸師の斬新な手法で、日輝和上の『一念三千論』解明への一助となれば幸いである。

〔註〕

(1) 望月歆厚『日蓮教学の研究』第十一章「優陀那日輝の宗学」・『日蓮宗学説史』第五篇「近世宗学の成立」第一章「優陀那日輝」

執行海秀『日蓮宗教学史』第四篇「江戸後期」第六章「優陀那日輝の充治園教学」

渡辺宝陽『日蓮宗信行論の研究』第五章「優陀那日輝の観心宗学」等参照。

初期の『大崎学報』を披見すると、多様な観点からの講演録などが多く、日輝和上については、短編が付録として収載されている。上記、望月歆厚先生・執行海秀先生以前の段階では、日輝和上の教学についての解析は遠慮されて、専ら鑽仰の対象であったかの感を受ける。

(2) 『新居日薩』に、野口之布が文部省・司法省に勤務したとの記事がある。(同書二〇七～二〇八頁)

(3) (1)の諸著参照。幕末には、大阪の適塾などの私塾が各地に立てられている。『充治園』開塾については、そうした時代背景との関わりがあるかと思われる。

- (4) 『大田区史』資料編1(四六六～四七五頁)に、日輝和上を招請する文書が掲載されている。(照栄院所蔵)
- (5) 執行海秀『日蓮宗教学史』第四篇「江戸後期」第三章「一妙日導の宗学組織」
- (6) 執行海秀『日蓮宗教学史』第四篇「江戸後期」第四章「日導教学の展開」第一節「事成日寿の刪訂」
- (7) 二〇一九年、山喜房仏書林刊。
- (8) 立正大学日蓮教学研究所内「充治園全集刊行会」編修(大正十二年十月 初版発行。昭和五十年十一月 校訂発行) 大東出版社刊。
- (9) 『摩訶止観』については、幾多の論者がある。近年では、池田魯参『詳解 摩訶止観』(定本訓読篇〈天巻〉)一九九七年刊。(研究註解篇〈地巻〉)一九九七年刊。(現代語訳篇)〈人巻〉一九九七年刊。いずれも大蔵出版社刊。がある。
- (10) 十干は、年や日の順序を示すのに用いられた。『一念三千論』文中の肩に十干の符号が付されているのは、おそらく漢学に詳しい野口之布の手になるものかと思われる。しかし、『一念三千論』の文章は、さらにその下に詳細な論議が展開している。日輝和上の頭脳中には、全体の文章がくまなく整合されていたという感じを受ける(なお、十干は〈木・火・土・金・水〉の五行をさらに兄・弟に分けたものという)。
- (11) 執行海秀『日蓮宗教学史』参照。渡辺宝陽『日蓮宗信行論の研究』第四章「近世日蓮教学における信行論の展開」第五節「観如日透の事観論」等参照。
- (12) 『峨眉集』執行海秀『日蓮宗教学史』一五七頁参照。なお『日蓮宗事典』(昭和五十六年・日蓮宗発行)五一頁に解説がある。